

平成 30 年 3 月 23 日

能美市議会

議長 南山 修一 様

教育福祉常任委員会

委員長 山本 悟

能美市議会教育福祉委員会 行政視察報告書

平成 30 年 1 月 23 日から 25 日にわたり、福岡県宇美町、山口県下関市等へ行政視察研修のため出張したので、その概要を報告します。

- 1 視察日 平成 30 年 1 月 23 日（火）～ 25 日（木）

- 2 視察先 福岡県宇美町立井野小学校 (23 日)
福岡市博物館 (23 日)
山口県下関市教育センター (24 日)
山口県山口市立瀧上中学校 (24 日)
山口県下関市立歴史博物館 (25 日)

- 3 内容 コミュニティ・スクール（CS）の取り組みについて

- 4 参加者 委員長：山本 悟
副委員長：北村 周士
委員：近藤 啓子、居村 清二、
嵐 昭夫、開道 昌信
随 行：生涯学習課 課長 小西 俊明

5 今回の視察のねらい

能美市教育委員会では、全小学校においてコミュニティ・スクールを県下でもいち早く導入し、地域と学校とのつながりをこれまで以上に深めていこうとしている。しかしながら、石川県内ではかほく市と金沢市の一部が導入しているのみで、県内の先進事例を研究することは難しく、能美市では中学校での導入が進んでいないという背景がある。

そのようななかで、全国でもいち早く取り組みを始めた福岡県宇美町、山口県下関市・山口市は、各学校単位や中学校区での連携などが行われており、人口減少社会へ向けて、

子どもたちが地域に帰ってきやすい環境づくりに早期に取り組んでいる。単にふるさと教育を行うばかりではなく、地域の大人の背中を見せることにより、子どもたちの早い段階での地域協力、社会参画を狙っているのである。

本視察では、これらの先進的な事例に、能美市としてどういったことを導入できるのか、中学校で導入するにあたってはどのような取り組みが必要か、コミュニティ・スクールを導入したことによる変化などを学び、能美市内中学校での早期の導入が可能かどうか、どういった取り組みをすることで地域や子どもたちの保護者の理解が得られるのかを研究しようとするものである。

また、能美市で建設が計画されている新博物館についても、リニューアル間もない福岡市博物館の展示手法、新規オープンから1年を経た下関市立歴史博物館の状況に学び、今後の実施設計、展示計画に議会としてしっかりと関わっていくための調査研究を目的とした。

☆福岡県宇美町立井野小学校

市民性の育成、子どもの育ちと学びの場づくりによって“市民力の育成”を目指してコミュニティ・スクール（以下、CS）を導入した。町内の5小学校、3中学校の全てがCSを導入しており、学習応援（赤ペン先生事業）、田植え指導、餅つき体験、昔遊び指導など、町民参加の活動が行われている。

井野小学校ではCS6年目となっており「学校も家庭も地域も生き生きする校区づくり」をテーマに行われている。学校運営協議会の下部組織として、学力向上委員会や豊かな体験委員会、体力向上委員会、安全活動委員会を設置し、それぞれが事業を行っている。これら4つの委員会の活動が充実することにより、子どもたちの学習効果が上がったのが第一の成果であり、地域行事に参加する子供たちの増加、地域全体で子育てを推進する環境が整ったという。

課題としては、ボランティアが固定化していること、そして今後さらに、地域＝町会組織との合議により、深化させていきたいとのことであった。

また、実感として、中学校への導入は、2つの小学校から1つの中学校へという場合は難しいこともあるが、1小学校からそのまま中学校へ進学する場合は対応しやすいことがあるということであった。その中で小中連携も中学校から小学校へ出向く格好で行っているとのことであった。

☆福岡市博物館

常設展示をリニューアルした博物館を視察した。

目玉資料は国宝「漢委奴国王」金印であり、来館者の目を引くような展示方法がとられていた。具体的には照明を落とし、部屋全体を黒で統一することで、わずか数センチの展示品を注目させるというものである。

土器の展示にも工夫が見られ、土器を展示台に置いて展示するのではなく、壁面に浮かせて展示をすることで、器面全体を見通せるような工夫がなされている。土器の変遷、全体像を把握する上で参考にされるべき展示方法であると考えられる。

展示動線も工夫されており、広い館内を同じところを二度通らなくていいような工夫が随所に見られた。来館者にストレスを与えることのない展示に工夫がなされている。

建物自体は古い建築ではあるものの、展示室をリニューアルすることで、新しい展示施設というような印象を与える展示室となっていた。

なお、入館料は200円で、公共の博物館として低価格に設定されている。

☆下関市教育委員会教育センター

導入のメリットは、組織的・継続的な連携、協働体制の確立ができた点、地域や保護者への説明責任の意識の向上、風通しの良い学校運営が可能となった点、また学校運営協議会委員が当事者として意識と責任感が醸成された点が挙げられている。

学校が主となり地域の人に学びの場を提供することを行っており、地域の方々からは「学校が地域からパワーをもらっている」ということで「学校に恩返しをしたい」という意識が芽生えてきているということであった。CS ルーム（コーディネーターなどが自由に使い、事務作業ができ、各種講座の開催をするための部屋）の設置も70%で進んでおり、拠点としての機能も充実している。

コーディネーターに対しては、年間に2回コーディネーター情報交換会を行っており、その交流が、各学校での取り組みを知る機会となっている。

取り組んできた成果として、学校で子どもを育てるという教育観から地域で子どもを育てる共育観への意識改革ができた点、子どもを育てる教育の場としての学校から地域活性化の場としての使命感と誇りが生まれた点であるということである。

☆山口市立^{かたがみ}瀨上中学校

3小学校から1中学校へという状況で、CS コーディネーターの若い女性が、中学校でも同一の活動を行っている。このコーディネーターの活動が大きな原動力となっており、その可能性の無限性を見た感がある。

CS ルームでは、地域の人による読み聞かせや華道の講習などが行われており、子どもたちがそこで学んだ成果、すなわち読み聞かせでは本の紹介、華道では作品を廊下に飾るなどの取り組みが行われている。

生徒からコーディネーターを募集するという取り組みも行われている。このコーディネーターは部活動の一環として行われ、CS コーディネーターと企画立案、運営を行っている。その生徒には、「自己が必要とされていることを感じてもらいたい」という思いもあり、やがて彼らが地域を担う大人に成長してほしいとの願いも強い。人口減少が続く地区

の中にあつて、どうすれば子供たちが帰ってきてくれるか、郷土愛をどのように育むかという視点でCSの取り組みが行われている。

学校運営協議会の進行は、学校長が行うのではなく、選出された会長が担うこととしており、学校主体の取り組みではないようにしている。CSの中で幼保小合同運動会を行うなどの企画もあり、生徒CSはじゃんけん大会の司会や地域のお年寄りへの年賀状書きなども行っている。

CSの将来性については、継続できる組織を作ること、小中連携を密にし「地域協育ネット」の考え方で行うことが必要としている。

なお、潟上中学校では、県から派遣されたCSコンダクターが校長やスタッフのアドバイザーを担っている。県内に十数名のコンダクターがおり、一人あたり数校を担当する立場で、元学校長・元教員などの人材が就いている。校長が2年程度で離任したとしても、コンダクターが継続していることで、学校や地域との関係性が途絶えないメリットがあるほか、学校や地域から一歩引いた立場での見地からの発言は、相互にいい影響を与えているようである。

☆下関市立歴史博物館

平成5年に庁舎内における若手職員により「博物館を考える会」を設置し、平成28年11月に開館した博物館である。

コンパクトな博物館でありながら、空間を生かした、広々とした奥行きを感じさせる作りとなっている。

文字資料の重要文化財を展示する必要から、早期に文化庁との折衝を始め、収蔵庫の方角や位置、動線などについて協議を重ねてきた経緯がある。観光地の一角にある立地であるため、年間来館者数は7万人程度で推移しているという。

収蔵庫にも特別の配慮をしており、最新のAR技術を用いた坂本龍馬との写真撮影機能、展示品の音声解説なども盛り込まれている。

学芸員は6名おり、事務と兼ねた職員はそのうち3名、専門としては3名とのことである。

●所感

コミュニティ・スクールを教育福祉常任委員会の年間テーマと定め、特に、

- ① 子どもたちがたくましく育つための施策
 - ② いかにして地域との連携を図っていくのか
- を重点的な課題としている。

また、能美市が建設を進める新博物館についても、リニューアル後の博物館と新設1年を経た博物館の現状を視察することで、今後の建設計画の参考としたものである。

CS については、能美市では中学校の導入がなされていない点が今後の課題になると思われる。石川県内では、かほく市に次いで先進的な取り組みを行っている能美市ではあるが、小学校単位の取り組みとなっているのが現状である。今回の視察先では、そのいずれもが中学校での導入を進めており、中学校校下単位での取り組みとすることで、切れ目のない地域連携が行われており、大いに参考となるものである。

具体的には潟上中学校の事例が大いに参考になろう。各校のコーディネーターが中学校の CS ルームに集まり、中学校のコーディネーターや校長と様々な事業を行っている。この取り組みは、人口減少社会にあって、いかに「地域愛」「ふるさと愛」を持ってもらうかという、差し迫った状況の中にあるものとはいえ、今後 10 年先、20 年先を見据えた能美市としても、積極的に参考にすべき事例であると考えられる。中学校単位とすることで、分断されがちな地域のつながりもより強固となり、参加者も増える要素があり、継続的な事業遂行を可能とするのである。

また、CS を部活動として位置付けることは、近年増加傾向にある「不登校」や「引きこもり」などを解消するための一助となっていた。地域のために必要とされていると子ども頃から意識することで、将来の担い手を増やそうとするものであった。こういった取り組みこそが CS の目指すところではないだろうか。

他方、各先進事例を聞いている中で、能美市内で既に行われている各行事、すなわち保護者による草刈りや、見守り活動、交通安全指導、「まちの先生」のような取り組みは、実はれっきとした CS の取り組みといっても過言ではないことに気づかされる。文部科学省を中心に CS という言葉が提示されているわけだが、学校運営協議会のような組織的なものは別として、その他の活動は既に能美市に浸透していると言っても過言ではない。CS を導入したことによって、今後、従来の活動が CS の概念に当てはまるものであるという市民意識の向上、学校との認識の共有を図っていくことが「能美市版 CS」を発展的に捉えていく重要なテーマとなるだろう。

CS コーディネーターには若い世代の活躍が目立ったのも今回の視察における大きな収穫のひとつである。能美市においては退職教員など、これまでも地域に関わってきた立場の人材が多いのも特徴の一つである。その良いところは否定するものではないが、新しい活動を保護者目線で取り組んでいこうとするとき、若い世代の、これまで地域に関わってこなかったような立場の人材を育てていくことも重要である。機会があれば、今回紹介くださったコーディネーターをお招きし、啓発活動を展開していきたいものである。

博物館については、

- ① 館内動線の重要性
- ② 展示手法
- ③ 建設までの経緯

といった点で資するところが多かった。限られた館内の展示施設をどのように見せるのかについては、動線の設定が不可欠である。それぞれの館で、見せ方について相当の知恵を

出していることがうかがえる。時代ごと、テーマごとの設定、あるいは子ども目線に立った動線設定は、今後の博物館構想の中で重要なウェイトを占めている部分である。音声ガイドや最新アプリを用いた展示手法、最新映像を用いた市の概要説明など、見るべき点は多々あった。予算、費用対効果を考えつつ、どのような導入が能美市としてできるのか、今後、あらゆる事例を検討していかなければならないと感じる。

また、建設までの経緯について、下関の博物館では、20年にも及ぶ構想が練られている点も特筆すべきである。市民生活に直結する施設ではないからこそ、綿密な検討、構想を経て建設されるべき博物館であり、それによって地域住民への理解も得られるものである。そのような事前の検討を密にすることによって、揺るぎのないコンセプトが出来上がっているのだと感ぜられた。

建設1年で7万人前後の入館者数があったという点も、能美市の現状と比較すると「うらやましい」数値である。博物館が単なる人寄せの施設ではないにせよ、やはり多くの方の目に触れることがなくては、その存在価値が大きく変化する。能美市として今後どのような誘客を図るのかも課題となっていくであろう。

文化庁など、関連官庁との連絡も密になされていることが報告されたが、能美市においても、関係省庁、県の施設などと連携し、よりよい展示なる工夫をしてほしいという思いも持ったところである。特に、資料保管の点では「2回の夏を空のままで越す」（それだけの期間、湿気を取り除くため、空気を安定させるために空のままでオープンや利用を待つ）ことを条件とされたということであり、資料保全の観点からも、大いに参考とすべき事柄であった。

議会として、地域との連携を目指す学校の新たな取り組みであるCSには、学校運営協議会の中に議員の参加も必要であるといった声も聞かれた。また、博物館構想についても、議員それぞれの見地から、よりよいものを創りあげるために、多くの意見を聴取する必要性を感じた。今後、議員各位が、それぞれの立場・見識でもって、これら能美市の重要課題に取り組んでいくことの必要性を強く感じたものである。